



W.A.Mozart Hiroba

「モオツアルト広場」 SINCE 1995

第20号



## 避けられないテーマ、父について

……聴いて欲しいモーツアルト その17

会員番号 K618 加 藤 明

会報第20号記念号ということで、しばらくは浮かんできたモチーフである「二つの20番」に思いを巡らせていました。

二つの20番とはピアノ協奏曲二短調K466と弦楽四重奏曲二長調K499のこと。

このうちピアノ協奏曲二短調について書き綴っていく過程で、またしてもモーツアルトと父レオポルトとの関係、そしてレオポルト自身について触れざるを得ない局面に出くわしてしまいました。

というのは、この有名な20番のピアノ協奏曲が産声をあげるその現場、つまり1785年2月11日のウィーンの集会場（メールグルーベ）その場に偶然にも父レオポルトが立ち会っていた、という特筆すべき作品だったからに他なりません。

レオポルトはすでに嫁いでいた娘のナンネルにザルツブルクの留守宅をまかせ、息子ウォルフガングの現状視察に（弟子のマルシャンの教育効果も兼ねて）ウィーンを訪問したのですが、ウィーンについてその日が2月11日だった、というサプライズが待ち受けていたのでした。

偶然と思われる根拠は当時の馬車という不安定な交通手段や、さらに2月という雪深い気候条件などからであり、加えてこの傑作が完成したのは前日の10日であったこと（急いで作曲したためモーツアルトにカデンツァを書く時間の

余裕がなかった）などの事実から容易に推察されるからです。

ウィーンでの独立宣言から早や5年、息子ウォルフガングからの手紙でその活躍ぶりは知っていたものの、ウィーンに着いたまさにその日にいきなり我が子の晴れ舞台を目撃することになったのでした。

このように、この20番はすでに大変意味深い性格をもった一曲なのですが、たまたまその曲想も数多いピアノ協奏曲のなかでその特異性において際立っているのです。

この曲のもつにか凄まじい躍動感はモーツアルトの自信にあふれる豊かな才能を暗示し、その分泌された豊かさはそのまま人生の楽しさや誇らしさをも謳っているかのようです。

これほど深く内省的でありながら無限の躍動感を共存させている協奏曲をこれまで人々は聴くことができなかった、といってもいいのではないでしょうか。

だから、若きベートーヴェンが後年モーツアルトに代わって（？）とびきり上等なカデンツァを書くことになるように、この曲はいつの時代も青年にとって聞き捨てならない響きがあるとは言えますまい。

ところで、私はこの初演現場に出くわした父レオポルトが抱いたであろう例えようのない勝

利感はレオポルトのこれまでの不遇な実人生一切を相殺するほどの出来事だったのでないかと推察しております。

永い間不遇をかこってきた、しがない宮廷ヴァイオリニストでしかなかったおのれ。

どんなに才能があっても、イタリア人でないというだけで立身出世がままならない現実の辛酸を舐めてきたわが身をいま人生の晩年に立て振り返る自分がいる。

激しい親子喧嘩はしたが見事ウィーンで自立し、しかも圧倒的に貴族諸侯に、いや皇帝にさえ迎えられている我が息子を見よ！

レオポルトが目の当たりにする我が子に自身を投影させて、湧き上がる勝利感に酔いしれたことに疑いの余地はないのです。

その勝利感の一端を我われはレオポルトがザルツブルクの留守番役を依頼した娘のナンネルに送ったウィーン到着直後の手紙に垣間見ることができます。

そこには「演奏会はこのうえなく素晴らしいものであった」とだけ綴られているのですが、あれほど音楽理論に通じ、語彙力豊富な作曲家レオポルトにしてはあまりにシンプルな感想で、いわば素人の感想としか思えないほどの舌足らずなのです。

私はこのシンプルすぎる表現に前述のレオポルトの万感の思いが込められていると思うのですが、どうでしょうか？

何がどうしたというより、眼の前のすべてが文字通り素晴らしいものであったのでしょう。



レオポルトを想うとなぜか私は自分の父のこととを連想することがあります。

どこか、生い立ちとか生き様とかが似かよっているように思われるからです。

今年は父が他界して40年の節目の年ですので、余計そんなことを考えるのかも知れません。

私の父は1917年（大正6年）五城目町の田舎で小作農を営む農家の二男として生まれました。

当時そこそこの田畠はあったらしいのですが、長男である兄がその家を継ぐことになる慣習からして、いずれは実家を出て何らかのかたちで独立せざるを得ない宿命を背負っていたわけです。

大正生まれの共通した特性のひとつに青年期における昭和の戦争体験がありますが、私の父もこの日中間を火種とした戦争という運命に巻き込まれた一人です。

父は昭和13年、20歳のとき天下晴れて秋田第十七連隊に入隊しましたが、軍国主義時代の落し子よろしくかなり張り切って軍人への道を歩んだようです。

裏を返せば、この入隊は農家の二男としては願ってもないチャンスであったろうと思います。

正に渡りに船といった状況だったのです。

そして、その後父は晴れて希望の大地であった満州大陸に衛生兵として赴きました。

父は敗戦までのほぼ8年間を満州で過ごしますが、かの広大な大地は血氣に走る二十代にあって、その後の人生を決定づける過激すぎるほどのドラマの舞台となったようです。

それは軍隊特有のいじめに遇い、いじめた上官を殺める寸前まで追い詰められた激烈な葛藤の姿であったり、一介の子持ちの衛生兵が医師の国家試験を勝ち取るための涙ぐましい努力の姿であったり、如何にして家族3人（母と幼い兄と姉）をロシア兵から守り、無事本国に帰還させるかに奔走する、父親としての本能的な生きざまであったりするのです。

父は後戻りできない現実を一身に背負い、引き揚げ後の1947年（昭和22年）医師の資格をとったのですが、すでに30歳になっていたことになります。

その後開業した山本郡下岩川で私が生まれるのですが、もの心ついてから49歳で他界するまで私にとって父は、厳父である以上に凄まじく息が荒く、過剰な責任意識と《生き急ぐ生き様》を特徴とする戦争体験者の一人として君臨

していました。

自分がそうしたように子供にもひたすら目標と努力を強要するところや、貧しく社会的ヒイラルキーの低い農家の二男だった自分がいつか立身出世を果たし、世間の人望を集める人間になろうと念じたところ、そして音楽が好きで（もの心ついたらS P盤の美空ひばり全集が我が家にありました）特に民謡を唄わせたら絶妙な節まわしで周囲を喜ばせていたところなどから、父はレオポルトの生き方に酷似していると思うようになった、という訳です。



レオポルト・モーツァルトつまりモーツアルトの父は1719年南ドイツのアウグスブルクに製本業を営む家に5人兄弟の長男として生まれました。

マイナード・ソロモンによると、16歳で父に先立たれた一家の長男として、本来はアウグスブルクにとどまり父の製本業の後継ぎとして修行の道に入るべきところであったが、学業（特に教会の聖歌隊での抜群な音楽的才能は誰しもが認めていたようである）がすこぶる優秀であったため、当時の神父などの支援を得てザルツブルクの大学への進学をめざすことになるのです。

しかし、厳格な母が家を守るためにその進学を嫌い、家族をとるか大学をとるかと迫りました。向上心の勝るレオポルトは悩んだ末に故郷のアウグスブルクを棄て、自分の将来の夢（たとえば高位の役人など）を求めてザルツブルクに転

がり込んだのでした。

そこには知性的な青年が抱く当時の腐った聖職者や理不尽に奢り高ぶった貴族らへの義憤といった、今となっては自然な市民感情も見え隠れしています。

この息子の最終決断を母は徹底的に憎み、驚くことにはついに廃嫡するに及びました。

そしてそれ以後二度と二人は顔を会わせることがなかったといいます。

こうして後戻りができず寄る辺のないザルツブルクでの大学生活を送るのですが、この大学生活も決して安寧なものではありませんでした。

何らかの陰謀に巻き込まれ、2年次の道半ばで大学から出席日数が不足との理由により除籍処分をうけることになるのです。

この理不尽な仕打ちに対しても平民、成り上がりとしての無力感を味わったレオポルトですが、持ち前の知力と克己心を武器にどうにかこの地にとどまることを決意するのでした。

その後、レオポルトの能力を評価していたひとりの教授に助けられ、ザルツブルク市内のトゥルン伯爵家に召使として住み込むことになるのですが、そこからヴァイオリンを勉強しながら雑用をこなし、立身出世のために明けても暮れても精進する異端児、努力と英知の人レオポルト・モーツアルトがのしあがっていくのです。

この先、レオポルトはわれらがモーツアルトの母マリア・アンナ・ペルトゥルと出会い、結婚することになるのですが…。

紙面の都合で割愛せざるを得ませんが、その後はみなさん御承知のナンネルとウォルフガングの登場となるのです。



こう書き連ねてみると、時代こそ隔たってはいますが、その生い立ち、自我の発展形成、大きな知性に憧れることや音楽への愛着とこだわり、そしてわが子へのあからさまな教育指導ぶりなどなど、わが父とレオポルトの類似性は驚くばかりです。

反面、私はこのような類似性を決して特殊なものではない、いや特殊なものとして封印してはならない、と考えておりました。

確かに、それぞれの時代背景もあり、このように激しく自らを律し艱難辛苦を生きた二人ではあるが、その生涯においてどれだけ多くの助力や支援に救われてきたことだろうか、という背後にある社会的な恩恵を無視することはできません。

残されている資料などから、知れば知るほどに多くの様々な救いの手が二人を支えていたし、より善く生きる方向に導いてくれていたことが改めて認識できるのです。

私は、レオポルトを単にモーツアルトの父で終わらせるのではなく、「どのような生き方を経てモーツアルトの父に成りえたのか」にもっと光を当て、レオポルトとともに肩をならべて生きてみたいと思っています。

今回のテーマ、ピアノ協奏曲二短調を再度調べ漕ぎ出したら、どうしてもレオポルト・モーツアルトに停泊する私がいました。

その停泊中のお話として読んでくだされば何よりです。

それでは、レオポルト・モーツアルトとほぼ同時代を生き、古事記や源氏をいまに蘇えらせた本居宣長の歴史への向き合いかたを見事に表現した秀歌を記してペンを置くことにします。

《古ぼとの 文をら読めば 古えの手振りこととい 聞き見る如し》

○推薦盤はハスキル（P）とマルケヴィッチ（Co）が1960年11月に録音したフィリップス盤が頂点と思っておりますので、まだの方はどうぞ。これを凌駕する演奏にまだめぐり合っておりません。

## モオツァルト広場 サマーコンサートに寄せて

名誉会員 K271 久 元 祐 子

最初にモオツァルト広場の加藤さんにお目にかかるせていただきましたのは、私が、初のモーツアルト本「モーツアルトのクラヴィニア音楽探訪」（音楽之友社）を刊行し、出版記念コンサートのときでした。

秋田からいらしてくださいました加藤さんが、ホールの横のレストランでモーツアルトへの熱い想いを語られた日のことが昨日のことのように蘇ります。

あの日から早10年たちました。

私自身、その間、生誕250年祭で、「戴冠式」やK488など、コンチェルトでフィーバーしたり、初のモーツアルトのCD「青春のモーツアルト」録音に挑戦したり、数々の演奏会でモーツアルトを音にしてきました。



1999. 7. 21  
第3回サマーコンサートに初登場！

2000人のホールでフルコンサートのピアノで弾くことあれば、数十人のサロンでフォルテピアノを演奏することもありました。モーツアルトとともに、あっという間の10年間でした。

毎年、暑い季節に、モーツアルトへの熱い想いにあふれた加藤さん、秋田の演奏家の皆さんにお会いし、モオツァルト広場とモーツアルトの音楽を通じて、秋田の皆様にお会いできますのは、私のモーツアルト人生にとって、大切なエポックになっています。今後ともモオツァルト広場のご発展をお祈り申しあげます。

## 日本人の好きなモーツアルトの曲ベスト15

会員番号 K203 松田至弘

クラシック音楽の中で現在、日本人に最も愛されているのは、モーツアルトの音楽であろう。

では、日本人に特に好まれているのは、モーツアルトのどの曲であろうか。いつもそれを知りたいと思っていたが、残念ながらそのことを明らかにした具体的なデータに、ついぞお目にかかることができなかった。

モーツアルトの曲の中から「ベスト1」を選んで、その曲についての思いを熱く綴ったエッセイを雑誌で読んだことがあったが、有名な作曲家、作家、評論家、学者などのものであり、わずか数人の好みを紹介したものであった。

勿論、それはそれで参考になったが、私は一般の人々の好みがどんな傾向を示すかということにも興味があった。そんな折、目にとまったのが、NHKの実施したアンケートとその結果である。

モーツアルト生誕250年に当たる2006年の5月5日、NHKは「熱狂の日・音楽祭2006」の会場=東京国際フォーラムから「親子で楽しもう！春のモーツアルト祭り」を放送した。(BS2) 約6時間にわたるこの生放送の最後に、5月3日から5日の3日間に実施したアンケート「あなたの好きなモーツアルトの曲は？」のトップ10が発表された。

「熱狂の日・音楽祭」について少し説明を加えると、この音楽祭はルネ・マルタンの発想により1995年にフランスの地方都市ナントで始まり、クラシック音楽の大衆化を促進している。

2005年から日本でも行なわれるようになり、2006年の音楽祭は、「モーツアルトと仲間たち」

をテーマに、4月29日から5月6日まで丸の内・周辺エリアで行なわれた。

新聞報道によると、何と70万近い人々が会場を訪れたという。アンケートは、このような音楽祭のにぎわいの中で、クラシック音楽愛好の初心者や子供たちなどをも対象として実施されたのである。

NHKによると、アンケートは、用紙にあらかじめ選定した33曲を記載しておき、その中の一番好きな曲を一つ選ぶ方法で行い、リストにない場合には、別に記述してもらったという。

アンケートには3532人が回答を寄せている。下表は、15位までをまとめたものであるが、1位の「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」は

順位	曲名	K番号
第1位	アイネ・クライネ・ナハトムジーク	K.525
第2位	歌劇「フィガロの結婚」	K.492
第3位	レクイエム	K.626
第4位	歌劇「魔笛」	K.620
第5位	ピアノ・ソナタ第11番 「トルコ行進曲付き」	K.331
第6位	交響曲第41番「ジュピター」	K.551
第7位	きらきら星変奏曲	K.265
第8位	交響曲第40番	K.550
第9位	ピアノ協奏曲第20番	K.466
第10位	クラリネット協奏曲	K.622
第11位	フルートとハープのための協奏曲	K.299
第12位	アヴェ・ヴェルム・コルプス	K.618
第13位	交響曲第25番	K.183
第14位	ピアノ協奏曲第21番	K.467
第15位	歌劇「ドン・ジョヴァンニ」	K.527

(NHK音楽・伝統芸能番組部提供の資料を、著者が表にしたもの)

395票、2位の歌劇「フィガロの結婚」は249票、3位の「レクイエム」は239票、そして、4位の歌劇「魔笛」は237票、5位の「ピアノ・ソ

ナタ第11番」は215票を獲得している。

会員の皆さん、このデータをご覧になって、どのような感想を持たれるであろうか。

## 特に第2楽章が好きです

会員番号 K299 永田佳乃子

こんにちは、モオツアルト広場娘。略してモオ娘。会員番号 K. 299の永田佳乃子です。

モーツアルトのことはほとんど知らないのに、なんとなくモーツアルトが好きというだけでモオツアルト広場に加えていただき、会報に文章まで書かせていただくことになりました。

お目汚しでございますが、しばしお付き合いくださいませ。

私の会員番号は、忘れもしません、今から12, 3年前（←忘れてる）モオツアルト広場の加藤代表に、会に誘われたときについていただきました。



「永田さんのイメージだから」というお話し  
だったのですが、お恥ずかしいことに当時私は

この曲のことを全く知らず、後日CDで聴いてとても美しい曲なことに感激したものです。

今回会報に書かせていただけるにあたり、あらためて「フルートとハープのための協奏曲K. 299」について調べてみたのですが、どれを見ても「生活に困っていたモーツアルトが就職口を探しにパリに来て、ある公爵とその令嬢のために作った曲。レッスン料を値切られ、嫌いなフルートとまだ不完全な楽器だったハープを使い、素人演奏家のために易しく作ったにもかかわらず、比類のない名曲」という解説がほとんどでした。

これを見て、複雑な気分になりました。私もフリーランスで働いていますが、割の合わないギャラを提示されたからといって、手を抜くなんて出来ない性分です（本当は手を抜けるほどの技量が無いという方が正しいのですが）。

いざ本番となると、なにもかもどうでもよくなって、仕事に没頭してしまいます。

ひょっとして、モーツアルトにもそんなところがあったのかなと、エキセントリックな天才というイメージしかなかったモーツアルトに少し親近感がうまれ、自分の会員番号に一層の愛着がわきました。

加藤代表があの時「永田さんのイメージだから」とおっしゃってくださったことの意味を、もう一度聞いてみたいなぁと思います。

## 記憶再生の手順

会員番号 K478 岡 部 久 子

モーツアルトもショパンも感じなかったことを日々感じている、と言えば大袈裟なのだけれど——つまり、早死にした方達は感じないで終わった数々の感じ方、発見をしながら過ごしている。

「全く、あちこちダメになって嫌になるね」と腰をさすりながら顔をしかめる夫に、心の中では、ご同様と思いつつ、顔はしかめたくないから「感謝しましょう、長生きしているんだから」と言う。

二人とも同じ年。ボケ方も大体、同様である。日常会話は万歳の様になってくる。

ある朝ふと「うーん、春に車庫の屋根に止った、あの珍しい鳥、なんという鳥だったっけ?」と私。「うーん」と夫も考える。図鑑を又取り出してくるのも億劫なので、二人で、しばらく考えていて、夫が「ミソパ!」と叫ぶ。それで思い出した。正解はタカの仲間の「サシバ」だった。夫は「サシバ」を「差し歯」と結びつけて記憶したらしいが、途中で「差し歯」は「味噌歯」に入れ変わってしまった。夫は、「入れ歯」でも悩んでいる。

記憶再生の道筋で一大発見をしたことがある。かつて競馬のダービー三冠馬。テレビであれほどその走りに見とれ新聞の二ページ大の競馬廣告いでた写真は、居間の壁にばんと張って何回も眺めていたのに二年たつと、その名前が抜け落ちた。どうしても思い出せない。なきなく、気がかりで、家事をしながらも考え続ける。と、何かが頭の中で引っかかった。あるリズムが浮ぶ。タータ・タン、タタタ。ああこれこれ、こ

のリズム! タータとやっているうちに、濁音が入っていたのに気づく。タ行?、それで、突然つながりました! ディープ・インパクト。なんとうれしい名前。

言葉を思い出すには、リズムが大事な要素となる、これは大発見でした。

忘れた歌、正確には歌詞を思い出すにはどうするか? これは、しばしばやっかいな事になる。例えば、二人で仲良く小学唱歌の「若葉」を思い出す。「あざやかな緑よ、明るい緑よー」ここからもめる。鳥居をつづみかおおいか。かおる、かおるか、そよぐ、そよぐかで一大論争になってしまう。

しかし、これなどは、一番と二番の歌詞がごっちゃになったに過ぎない。

こういう事がある。ドライブをしながらのこと。土曜日で天気が良かった。歩道を通る小学生くらいの野球少年が目に入った。まっ白なユニホームが凜々しい。つい「野球小僧を知ってるかい」と昔の歌が口から飛び出した。だが次の歌詞が出ない。忘れてしまった。うーんとうなっているとハンドル片手の夫が、しきりに自分の鼻のあたりを指差しているではないか。でも全然分らない。と、夫が「男らしくて純情でー」と歌い出した。

ああ、そういうことだったのですか。

記憶再生にはユーモアも必要となる。

## 柏木勇夫（たけお）さんを偲ぶ

会員番号 K476 佐々木 孝

6月28日、イヤタカのボストンCホールで盟友柏木勇夫さんを偲ぶ追悼晚餐会が日本国語教育学会秋田県支部が世話役となって開催された。ところが、この会の最後の献杯に先立って「五月の歌」〈春への憧れK596〉を全員で齊唱して感動的な会の幕が閉じられることになった。

「モオツアルト広場」の例会と同じようなやり方で会を締めくくったのは加藤代表からの強いアドバイスがあったからである。

「楽しや五月 草木はもえ…」で始まるこの「五月の歌」はモーツアルト晩年の優れた歌曲であり、また柏木さんのK会員番号でもある。1月生まれの柏木さんにとっては、歌詞にあるような5月、そして軽快な曲想は、ことさら春を待ちわびる憧れの気持ちをそそったに違いないと推察している。と申すのは、この曲を例会の度ごとみんなで歌っても彼は一言も発しなかったからである。会員登録のいきさつについては、この会の入会を執拗に勧誘した永久会員の故松本秋次氏が深くかかわっていたことは確かだが、詳細は分からぬ。多分小生が、歌曲を選んだことに関係があると推測している。

一日中隣の座席に座って、20年も仕事を共にした仲だが、モーツアルトについては取り立ててお話しすることはない。ただ、昭和53年の夏、西ドイツ（当時）のハンブルグでの世界読書学会議に参加した後、フランクフルトからロマンス街道を南下してイタリアへ向かう途中ザルツブルグ音楽祭に参加するため、当地に2泊したことがあった。そのおり、二人でミラベル公園やモーツアルトの家を訪ねたことを、その後し

ばしば話題にした程度である。

しかし、彼は、「モオツアルト広場」から、例会やサマーコンサートの案内が来ると、ことのほか喜んだ。そして、入場券を誰にあげるか毎回思案するようであった。特に日ごろお世話になっている人、同じ職場でピアノやエレクトーンなど楽器を演奏している人、音楽に関心のある人などを探しては、券をあげていたようである。人を愛し、仲間を愛し、組織を愛した柏木さんは、「モオツアルト広場」にとってもかけがえのない人だった。謹んでご冥福を祈る。

例会の最後に歌う「五月の歌」は、これからもいっそう心を込めて歌いたい。



## 「モオツアルト広場」に思うこと

会員番号 K503 豊 島 鈴 子

モーツァルトの音楽との最初の出会いは、私が3・4才の頃母が口にしていたモーツァルトの子守歌です。澄んだ声で歌う母の歌から、純粋にモーツァルトの音楽に憧れの気持ちをもったものでした。今でもその気持ちは変わりません。

私は音楽は大好きですが、演奏家になるほどの才能は持ち合わせていないので、子供たちと一緒に音楽をして感動体験を味わいたいと考え音楽教師をしました。純粋な子供たちと音楽した思い出は私の宝物です。

その中の一つにモーツァルトが1791年に作曲したオペラ「魔笛」があります。「この笛いったい何だろう」と思わせる楽しいメロディーを合唱にした「魔法の笛」を中学校の授業の教材にしたことがあります。中学生はモーツァルトのワクワクした気持ちを素直に表現してくれました。

その後、ウィーンの国立歌劇場で、「魔笛」を鑑賞しました。モーツァルトの本場ウィーン国立歌劇場のメンバーの演奏は、私の想像を遥かに越えるものでした。これが私にとって最初

の「モオツアルト広場」だったと思います。

小学校4年から6年までの担任は松本秋次先生でした。その後、先生には大学時代から現役時代を通して音楽を教えていただきました。

退職すると同時に先生から「モオツアルト広場」へのお誘いがありました。すぐに入会しました。これが私にとって第2の「モオツアルト広場」です。会を重ねるたびにモーツァルトの音楽の新しい発見があり、演奏会をいつも心待ちにしています。久元祐子先生の演奏は、本物のモーツァルトの音楽が聞き手に伝えられ、モーツァルトの世界に引き込みます。また、先生は、協演する秋田の若い音楽家たちを一瞬の内にモーツァルトの世界に誘い込み、すばらしい演奏をしてくださいます。このようにモーツァルトの音楽がすてきな人々との間で奏でられるのです。

「モオツアルト広場」を提供してくださっているイヤタカの加藤さんははじめ事務局の方々に深く感謝申し上げます。

これから、ますます「モオツアルト広場」が楽しい会になりますように…。

## 酒とモツの日々（20）

会員番号 K488 佐 藤 滋

ビールに始まり、生活必需品の値上げが続いています。他にガソリンや健保、年金も加わって、我々「後期高齢者予備軍」にとっては将来への希望がもてない時代といえます。若い人たちにとっても雇用不安、格差、負担増という不

満は毎日の暮らしの中で鬱積しているに違いありません。

「こんな時代にモーツァルト」と言われると、「それは暮らしにゆとりのある人の贅沢な音楽だから関係ない」と考えがちですが、こんな時

代だからこそモーツァルトをもっと身近に感じてもいいのではないかと思っています。

モーツァルトは階級制度、格差社会の中で耐え抜いた一市民でした。ザルツブルグ時代は「契約社員」であり、ウィーン時代は「フリーター」そして人生の大半を占める大旅行時代はほとんど「ホームレス」だったのです。

先日「Ray」というレイ・チャールズの伝記映画を観ましたが、その中で事故死した弟の葬儀場面がありました。会衆が陽気に歌うゴスペル（それは死者の靈をなぐさめる思いやりではあるのですが）のなかで泣き崩れる母親、それを見ながら自責の念に苦しむ少年時代のレイ。やがて大人になったレイは、ゴスペルを今に生きる歌として改変し、伝統を重んじる人々の批判中傷に屈せず自分の音楽に取り込んでゆきます。レイにとってのトラウマは「弟の死」より、死者へのなぐさめにはなっても生き残る者へは苦痛でしかない古い黒人音楽に対する不信感ではなかったかと思うのです。つまり音楽自身がかかえる矛盾が、レイの音楽を深くて独自のも

のへと昇華していったのではないか…。

「モーツァルトの音楽は明るく陽気で、金持ちのための気取った音楽さ。」と語る人は今でも多くいます。しかしふべーとーべーと違って、モーツァルトの時代は貴族に気に入らなければ収入が得られなかったのです。苦悩や不安を音楽でいかようにも表現できる才能に恵まれたモーツァルト、しかしそれでは生活ができない社会制度。モーツァルトも音楽自体がかかえる当時の矛盾のなかで模索を続けたのではないでしょうか。モーツァルトの音楽は一見明るくて上品だが、年を取るほどにその奥行きがわかってくると言われるのは、人生経験を経ることで音楽の内側に秘められた陽と陰の重層構造が聴こえてくるからなのでしょう。

酒に飲まれて自暴自棄になるよりは、明日のために楽しく飲む方が体には良いに決まっています。演歌におぼれて愚痴をこぼすのも結構ですが、「モーツァルトさん、あんたもやるねえ。」とディヴェルティメントを口ずさむ方が健康にはよほど良いと思いますよ。

## 事務局より

今回でモオツァルト広場の会報も20号を数えます。ほぼ1年に2回の割合で出しておりますこの会報も会員の皆様のご協力があってのものと事務局一同感謝しております。

今回は記念号ですので特に多くの会員のご協力を頂戴して立派な会報を制作することができました。久元祐子さんからも特別ご寄稿いただきました。モーツァルト、そしてモオツァルト広場の生い立ち、背景などについて

もより深く知ることができたかなと思います。

会報にもありますが、暗い話題が多いこんな時代だからこそモーツァルトの音楽に触れて、聴いて、もっと豊かな気持ちをもって日々を暮らしたいなと思います。

この会報が数を重ねるごとに会員の皆様の心も体もより豊かになってくれると幸いです。

(K575)

モオツァルト広場ではいつでも会員を募っております（H20年7月現在126名）

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）

お問い合わせ・・・秋田市中通6丁目 イヤタカ内 加藤まで

携帯電話 090(7939)4058